

VOL. 136

故郷を追われた方々への支援  
トルコ・シリア：地震被災者支援  
世界のADRAから

世界がわかる。ADRAがわかる。

# ADRA

EST.1985

# News

2023  
6



6月20日は世界難民の日。  
故郷を追われる日々に  
晴れ間が見える瞬間を

故郷を追われた方々の4割は18歳以下の子どもたち。この笑顔を守りたい。  
(写真：エチオピアにある南スーダン難民キャンプにて)

# ADRA Japan 事業マップ

ADRA Japanは、約120の国と地域に支部を持つ世界最大規模の国際NGOであるADRAの日本支部です。人種・宗教・政治の区別なく支援活動を行うことをモットーに、海外および日本国内の各地にて様々な活動を行っています。



## UKRAINE ウクライナ

### 人道支援

ウクライナ危機から16か月。現在も食料・生活用品不足が深刻であるほか、電力不足によって病院が機能できず、人々の命と健康の維持が難しくなるなど、約1,800万人のウクライナ市民が支援を必要としています。少しでもこの問題を解決するため、ADRAは弱い立場の方々へ食料・生活用品を継続的に支援し、医療施設へ業務用発電機を提供しています。今後も人々の状況に合わせた支援を継続します。



食料パッケージの受け取りに並ぶ住民の方々

## YEMEN イエメン



### 農業復旧支援

8年以上も続く紛争によってイエメンの社会や経済は弱り、2,430万人の人が命をつなぐためになんらかの支援を必要としています。国民の2人に1人が深刻な食料不足に直面する中、「自分たちの農業を再開したい」という強い意志をもつ約80世帯の住民に寄り添い、現在は畑に水を引く灌漑の修復をサポートしています。



ポンプ(写真左下)を使って水を井戸からくみ上げ、畑に水を引く灌漑を修復



## TURKIYE トルコ

## SYRIA シリア

### 地震被災者支援

→ p.6



## SLOVAKIA スロバキア

### ウクライナ避難民支援

## ZIMBABWE ジンバブエ



### 教育環境改善支援

かやぶきの東屋や青空教室だった学校に、新しい校舎が完成しました。2教室からなるこの校舎は太陽光発電による電気も整備され、計100名の児童が授業を受けられます。学校関係者は「校舎を活用して子どもだけでなく、大人にも教育を提供できるような方法を考えていきたい」と話しています。校舎のレンガは住民の方が作成しました。現在は対象校3校にもう1棟ずつ校舎を建設中です。



完成した校舎。夜は蓄電により電気をつけることができる



## AFGHANISTAN アフガニスタン

### 食料支援

アフガニスタンの人々は、わずかな収入の9割以上を食費に充ててもなお十分な食料を手に入れることができない生活を強いられています。社会経済の混乱や干ばつが続く中、この危機を生き抜くことができるよう、バミヤン県を支援活動の拠点にして食料や生活に必要な物資を配付しています。



3か月分の食料を各世帯に配付

ADRA Japan



**NEPAL** ネパール

**栄養・水衛生**

バルディア郡は乳幼児や妊産婦の栄養状態や水に関わる衛生環境が悪く、対策が必要な地域です。ADRAはこの地域の方々が自ら健康改善に取り組めるよう、啓発や安全な水の供給、近隣の保健栄養施設の補修、医療従事者や地域に密着した保健ボランティアの育成と能力強化など、住民の健康をサポートする活動に取り組んでいます。



青いサリーは地域保健ボランティアの印。住民の健康促進を担う重要な存在

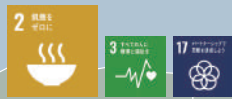
**教育支援〈ナマステ基金〉**

経済的な理由などから学校に通えない子どもたちをサポートする学資支援は、皆さまの温かいお支えにより、これまで延べ2,000人以上に支援することができました。今年度は、66人の児童・生徒を支援しています。今後は100人まで支援したいと考えているため、子どもたちの未来を支えてくださるサポーターを募集しております。



鉛筆を持つと真剣な表情に

**MYANMAR** ミャンマー



**国内避難民支援**

ミャンマーでは現在約180万人の方が安全を求めて避難生活を続けています。住み慣れた家を離れて着の身着のまま逃げ、日々の食料や寝泊りする場所に不便な生活を強いられている方々に、1か月分の食料、感染症予防用の蚊帳、住環境改善のための防水シートなどを配付しました。



受け取った支援物資を荷台に乗せて避難場所に移動する方々

**JAPAN** 日本



**防災・減災**

東日本大震災の原発事故から12年。支援活動で携わってきた宮城県、福島県の方々とは今もつながり続けています。福島県の高校生と活動する中で大変お世話になった元高校教員の大澤和巳さんに、今の福島県飯館村の様子についてお話を伺いました。インタビュー動画はQR、もしくはADRAのYouTubeチャンネルよりご覧ください。



インタビューを受けてくださった大澤さん(左)



● ADRA International (世界本部)

**ETHIOPIA** エチオピア



**ガンベラ州のクレ難民キャンプにおける衛生支援**

**アムハラ州北ウオロ県 紛争危機対応水衛生支援**

ガンベラ州の南スーダン難民キャンプでは、常にトイレの数が足りない課題があります。難民の方が、自分たちでトイレを作っていけるように建設方法の研修に取り組み、50人に技術を伝えることができました。北部アムハラ州では、紛争の影響により給水設備が壊れ、水不足が深刻です。壊れた設備を修繕し、衛生環境を改善する活動を続けています。



難民の方が自らの手で設置したトイレ。屋外排泄による感染症まん延の危険から自分たちの住環境を守ることができる。

ご紹介している事業は皆さまからのご寄付のほか、以下の機関・団体から助成や支援を受けて実施しています(以下敬称略)。  
 ●日本NGO連携無償資金協力(ウクライナ、ジンバブエ、ネパール)  
 ●特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム (アフガニスタン、イエメン、ウクライナ、エチオピア、スロバキア)  
 ●ヤマハ発動機株式会社(ネパール)  
 ●公益財団法人 テルモ生命科学振興財団(ネパール)  
 ●公益財団法人 風立つライオン基金(ネパール)

# ADRA JAPANの活動

## 6月20日は世界難民の日。 故郷を追われる日々に晴れ間が見える瞬間を



6月20日は「世界難民の日」です。1985年に発足したADRA Japanは、初年度から医薬品やテント、衣類の配付、また、教育プログラムなどの難民支援を続けてまいりました。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）によれば、2022年中ごろの時点で、故郷を追われた人の数は世界中で1億300万人。史上初めて1億人を超えました。今、この瞬間も戦火が収まらないウクライナやスーダンの情勢を見れば、その数が増加していることは想像に難くありません。今回は、ADRAが支援しているいくつかの国から届いた、故郷を追われた方々の声をご紹介します。

### アフガニスタン

およそ271万2,900人が祖国を離れて難民となり、345万人が国内で避難しているアフガニスタン。そこにマグニチュード5.9の地震が2022年6月22日午前0時過ぎに発生し、さらに多くの方々が避難生活を余儀なくされました。58

歳の男性は、苦しい胸の内を吐露しました。



「あの地震で息子を亡くしました。我が家の稼ぎ頭でした。

9人家族だった私たちに残されたのは、破壊された家、負傷した家族、そして家の下敷きになり亡くなってしまった泥だらけの息子でした。私たちは悲しみにくれながら野宿を余儀なくされました。

ただ、私たちのことを知った人道支援団体が駆けつけてくれ、テントをいただきました。今日もそこで暮らしています。今は新しい仕事を見付けることもできず、食料、医療、住居、安全な水は支援に頼るしかありません。食料支援をしてくれたADRAは私たち家族の命を救ってくれました」

### ミャンマー

ミャンマーでは2021年2月から始まった内戦によって2,600人以上の死者を出し、およそ117万

7,000人が国外に逃れて難民となりました。国内避難民は170万4,000人を数えます。

42歳の女性は言います。



「私は2022年4月23日に村を離れました。とにかく5人の子どもの安全が心配だったからです。常に戦火に怯えながら生活していた私たちは、水や食料さえまならない状態でした。

戦闘に遭遇する可能性や、地雷の危険もあるため食べ物を探しに行くのも怖く、毎日満足な食事をとれません。家族全員で防空壕に息を潜めていた時は、外から爆発音や銃声が聞こえてきました。防空壕は窮屈で居心地が悪く、食料や水など必要最低限のものさえ不足がちです。私たちは着の身着のまま逃げ、他の村人と一緒に高額な料金を払って車で避難場所まで逃げるほかありませんでした。本当にお金もありませんが、ADRAから食料の配給を受けて生活面の心配事が少し減りました。育ち盛



「これでしばらくご飯の心配はいらない」ADRAからの食料セットを受け取るウクライナの女の子



南スーダンから逃れてきた方々にインタビュー。  
エチオピア駐在員辻本(写真右)



川を渡らないとアクセスできない場所に逃れている方もいる。食料の積み下ろしには避難した方々も参加。  
ミャンマー・カレン州にて



食料の確保が非常に難しくなっている  
アフガニスタンでは支援物資が命綱

りの子が多いので助かります」

2021年9月に自宅を後にした57歳の男性も語りました。

「内戦に巻き込まれ、家や財産を燃やされました。私は妻と3人の子どもと防空壕に隠れましたが、体のあちこちを負傷しました。しかし、村での銃撃戦で人が殺されるのを見て、安全な場所に避難するしかないと感じました。身の回りの物すら持って出る余裕はなく、生き残った他の村人とジャングルに逃げ込みました。道路は封鎖されていたため、私たちは5時間ほどジャングルの道なき道を通り、ボートで川を渡りました。途中、安全な村々で食料をもらい、泊まる場所を支援してもらい、無事に避難場所に到着することができました。現在も故郷に戻ることはできず、緊張が続いています。でも、ADRAの支援を受け、食料調達の心配がなくなりました」

2021年5月に故郷を離れた63歳の女性も話しました。

「近隣の家が燃やされ、灰と瓦礫しか残らない光景を見てきました。私たちが暮らしていた土地は破壊され、かつて作物で青々としていた畑は、もう何も収穫できません。安全な場所に移

動するには怪我をしたり命を落とすこともあります。もはや避難するしかなく、私たちは地雷を踏まないように気をつけながら逃げました。安全な場所にたどり着くまでの3日間、多くの仲間が飢え、脱水症状に陥りました。軍に捕まったり、武装集団に遭遇する恐れもあり、不安で仕方なかったです。

私は故郷の村に、私の家に帰りたいです。ですが、内戦が続く限り戻れません。選択の余地はありません。家も土地も財産も失い、深い喪失感を味わっています。故郷に戻るという夢は、今では儚い希望でしかありません。とはいえ、ADRAの配給を受け、安心感を持てるようになりました。体重も少し増えた気がします」

## エチオピア

アフリカ大陸東部のエチオピアでは2020年11月に勃発した「ティグライ紛争」が、およそ2年間続きました。その結果、60万人の国民が命を落とし、52万世帯にのぼる2,272万人が国内避難民となりました。

現在、アムハラ州北ウオロ県

ジャラ国内避難民センターで避難所生活を送る67歳の男性は悲しげな表情で話しました。

「私が生涯をかけて作り上げた富や財産が壊され、かつ、多くの兄弟や知人を失いました。避難所周辺には、十分なトイレがありません。衛生的な環境が整っていないため、感染症が発生しています。患者を医療機関に運ぶ救急車もなく、給水車で運ばれる水も全員には行き届いていません」

同じように全財産を失い、叔母や従兄弟など、多くの家族と死に別れた35歳の女性も言いました。

「十分な水もなく、医療サービスも受けられないので、みんな体調を崩しています。女性用生理用品も足りません。石鹸、洗剤、着替えも足りないんです」

このような声を受け、ADRAはこの地域での衛生支援に取り組んでいます。

ご紹介した声はほんの一部です。故郷を追われた方々の悲しみや苦しみは、想像を絶するほど大きいものですが、皆さまの温かいご支援が届く瞬間は、人々の心にも光が差します。心より感謝申し上げます。



## TURKIYE SYRIA トルコ、シリア

# 両国で約1,800万人が被災した大地震。 それぞれの地で命をつなぎ復興を促す支援を実施

**2** 2023年2月6日、トルコとシリアの国境近くで世界最大級の内陸型地震が発生しました。ADRAはいち早く被災地域にスタッフを派遣し、トルコのガジアンテップ県、ハタイ県などの震源地周辺と、シリアのアレッポ県、ラタキア県、ハマ県を調査し、食料・衛生用品等の物資、住環境の改善・水の確保などが緊急に必要なことがわかりました。ただちにご寄付を募り、日本の皆さまから約3,925万円のご寄付をいただきました。おかげさまで3月末までにトルコで9,449人、シリアで45,564人、合計約55,013人の被災した方々の命を支え、復興を促す支援ができています。

トルコでは、震源地周辺の多くの方々が家を失い、市場も機能しなくなりました。そこで家を失った方が過ごすためのテント、生きていくための食料・衛生用品・防

寒具・調理具、また暗い所での安全確保のためにソーラー・ライトを配付しました。

シリアでは、震災前からの紛争の影響もあり、二重の困難に直面している方々が多くいました。そのような方々に発災当日から食料・衛生用品・防寒具等を配付したほか、避難所整備、給水・教育設備の修復、ソーラー・ライトの設置による住環境・衛生の改善などにも取り組み、被災した方々が積み重なる困難を乗り越えることができるように寄り添った支援を実施しました。

シリアのラタキア県でADRAの支援を受けている8歳のアダムくんは、食料パッケージを受け取った気持ちを次のように共有してくれました。「地震がおきてから、自分の家が安全ではないため、親戚の家で暮らしています。でも、たくさんの方がいるのであまり食

べ物がありません。いつもいつも、食べ物が足りないんじゃないかと心配で、悲しい気持ちになりました。けれど今は、ADRAからの食料パッケージのおかげで、家族みんなの食べ物が足りないという心配をすることなく、安心してご飯を食べることができます。それがとても嬉しいです。」

トルコにおける被災者支援活動は3月に終了し、現地の教会やNGOへ活動を引き継ぎました。シリアでは、紛争と震災の影響を受けて生活に困窮する方や、失業し経済的な困難に直面している方が多くいるほか、学校に行けなくなっている子どもたちも大勢います。そのため、今後も被災した方々の尊厳ある生活の回復を支えるため、一人ひとりに寄り添った支援活動を継続します。皆さまの温かいご支援・ご協力をお願い申し上げます。



食料パッケージを受け取るアダムくん(左)と妹さん(シリアにて)



避難所で約7,000人に衛生用品などを配付(トルコにて)

# 世界のADRAから

約120か国と地域に支部を持つADRAは、世界各地で活動しています。数ある活動の中から、一部をご紹介します。

## INDONESIA インドネシア



### 地震により家屋が倒壊し、プライバシーのない生活をしていた方々に、生活の復旧を支えるシェルター資材を支援

2022年11月21日にインドネシア、チアンジュール県で発生したマグニチュード5.6の地震は、300人以上の方の命を奪い、5万棟以上の家を破壊しました。避難生活を強いられた方は11万人以上。家を失った人々は広場に設置された簡易テントに身を寄せるほかなく、多いところではひとつのテントで50人が一緒に避難生活を送っていました。さらに、雨が降ると防水性のないテント内は水びたしになり、寝る場所にも困る状態でした。ADRAはこの現地調査に基づき、関連機関との調整のもと、丈夫な小屋を建てられるようにビニールシートや竹、くぎ、ハンマーなどのセットを配付しました。

3人の息子と高齢の母親、妻と一緒に避難したエナンさんは、1日でも早く家族が安心して過ごせる生活拠点を取り戻したいと考えていました。エナンさんは、ADRAから受け取った資材をもとに、ご自身の大工スキルも活用して、家の近くの空き地に小屋を建てました。家族のための居場所だけでなく、倒壊した家から持ち出せた家財道具を保管する場所も作ることができました。

小屋が完成したとき、エナンさんは笑顔で私たちに感謝の気持ちを伝えてくれました。「温かい支援に心からお礼を言います。この支援のおかげで、自分たちだけの住まいを建てることができました。

以前の避難テントでの生活よりも快適になりましたし、特に高齢の母が過ごしやすそうにしているのを見て、家族みんな、うれしく思っています」。

エナンさんの言葉からは、家族を想うやさしさも伝わってきました。この住まいを拠点として生活を建て直し、以前のように安心して暮らせる日が早く訪れるよう願わずにはられません。



左/発災直後から被災地域を調査するADRAスタッフ 右/エナンさんはシェルターキットを活用し、被災から1か月後には仮住まいを建てることができました

## アドラのチカラ



栗田 誉子さん(右)  
高校教師

### ADRA Japanを支えてくださる方をご紹介します!

#### — ADRA Japanを知ったきっかけ

通っている教会を通してADRAの存在を知りました。

#### — ADRA Japanとの関わりについて

勤めている高校で、ADRAスタッフの方にSDGsに関する講演会をしていただきました。今世界でどういことが起きているのか、私たちが今何をすべきなのかをお話していただきました。生徒たちの心に響くお話でした。

#### — ADRA Japanの魅力や関わっていてよかったことを教えてください

自分ではできない人道支援を世界的に行っていることが魅力です。

#### — まだADRAのことをご存じない方へのメッセージをお願いします

世界で困っている方々に支援をしたいという気持ちがあっても、実際には難しいです。ADRAを応援することで困っている方々の援助が出来たらステキだと思います。

#### — ADRA Japanへのメッセージをお願いします

私たちに代わってADRAの方々が支援をしていただき、感謝しております。お体に気をつけて頑張ってください。

# ADRA Newsは今後 デジタル配信にてお届けします

いつもADRA Newsをご愛読いただきありがとうございます。  
発行部数約6,000部から始まった本誌は、現在は約15,000人の方  
にお届けできており、心より感謝申し上げます。

インターネットが発展し、情報が多くあふれる中、私たちの活  
動について皆さまのお手元に確実に情報をお届けしたいという思  
いで、紙での発行を続けてまいりましたが、印刷や発送の費用の  
増加に加え、SDGsの観点から、紙の発送を望まれない方も増え  
てまいりました。そこでADRA Newsの発行方法について見直し  
た結果、今後はメールやインターネットを活用したデジタル版で  
の配信に移行することとしました。

これからも紙で読むことを希望されている皆さまには残念なお  
知らせとなりますが、デジタル版にすることによって、発行まで  
の時間を短縮でき、よりタイムリーな情報をお届けできること、  
印刷費や送料を支援活動に活用できること、最終的に廃棄される  
紙の量を減らせるなど、多くのメリットもあると考えております。

今後はADRA Newsの発行について、ホームページでお伝えす  
るほか、右の図説からメールアドレスやADRAの公式LINEをご登  
録いただいている皆さまには、今号も含めてご指定いただいた配  
信方法にてお届けいたします。また、今後も印刷して読みたいと  
いう方のために、ご家庭やコンビニなどで印刷しやすいA4サイ  
ズに変更しております。


郵便振替の寄付用紙も届かなくなりますので、これを機会に、  
口座自動引落やADRAフレンドへのご登録をご検討いただけませ  
うと幸いです。

ADRA Newsのデジタル化について、特別のご意見がある方は、  
ADRA Japan事務局までご連絡をお願いいたします。

これからも変わらぬご支援を、どうぞよろしくお願いいたしま  
す。

## 6月

紙版でお届けするのは最後です。今後も  
デジタル版でお読みいただける方は、い  
ずれかのお手続きをお願いします。

1 メールアドレスを  
登録する 



[www.adrajpn.org/info/3790/](http://www.adrajpn.org/info/3790/)

2 ADRAの公式LINEに  
登録する 



## 9月

デジタル版発行のご案内をお届けします。

## 12月

9月同様、ご案内をお届けします。ご案  
内をお送りするのは12月で最後となり  
ます。これ以降は、ご登録のメールまた  
はLINE、ADRAホームページからADRA  
ニュースをお読みください。

## 応援メッセージ

約30年前のボルネオ島での井戸掘りプロ  
ジェクト参加からADRAとの関わりは始まり、  
現在はADRAフレンドとして協力させて頂い  
ています。現地から届く葉書を見ると、ス  
タッフの方々の心遣いを嬉しく感じます。  
(伊能 忠嗣さん/ADRAフレンド)

ADRA Japanは「人間としての尊厳の回復と維持」を実現するため、キリスト教精神を基盤として、  
人種・宗教・政治の区別なく世界各地で国際協力活動を行っています。

ADRA News 136号 2023年6月1日発行

発行人 青木 泰樹  
発行 特定非営利活動法人 ADRA Japan (アドラ・ジャパン)  
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前1-11-1  
TEL : 03-5410-0045 FAX : 03-5474-2042  
E-mail : support\_adra@adrajpn.org  
Facebook : adrajapan Twitter : ADRA\_Japan  
Instagram : adra\_japan

### 団体概要

法人名 特定非営利活動法人 ADRA Japan  
所在地 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前1-11-1  
(JR原宿駅 徒歩5分、東京メトロ明治神宮前(原宿)駅 徒歩2分)  
代表者 柴田 俊生(理事長)  
事務局責任者 青木 泰樹(常務理事/事務局長)  
創設年月日 1985年3月30日

